

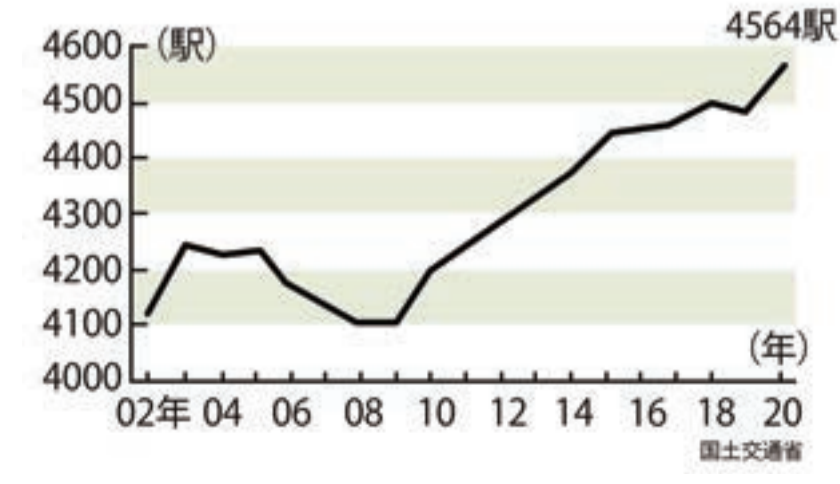
Zero station

—町木と屋根に集う 無人駅と地域コミュニティの創出—

無人駅はただの通過点でしかないのか。本提案では全国に増え続ける無人駅に焦点を当て町の新たな賑わいや経済活性化の拠点となる場を再検討するものである。

01 全国に増え続ける無人駅の問題点

01-1 全国の増加率



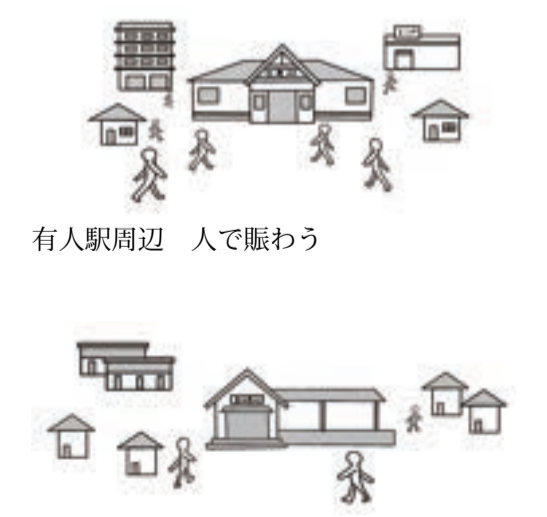
国土交通省によると、全国では無人駅が約20年で1割増え4564駅あり、全駅中の約48%にあたり全国の駅の半数に迫ってきている。さらにスマートサポーステーション(※1)の導入など、現在駅員のいる駅でも、今後無人となる駅が次々に発表されているなど、増加の一途を辿っている。無人駅の増加は、少子高齢化や都市部への人口流出で、地方鉄道の経営の厳しくなっていることなどが考えられる。(※1インターホンや自動券売機、自動改札機、係員対応精算機、列車接近放送装置などの設備を整備したJR九州の駅)

01-2 サービスの低下



無人駅における利用者への対応は、隣接の有駅からの対応になるため、高齢者や視覚の不自由な方、車椅子の利用者など助けを必要とする方への即時対応は困難である。もし誰かが助けを必要としていたら、声を掛け合えるような駅の環境、地域のつながりが不可欠であると考えられる。そのためにも全ての利用者が安心して円滑に利用できるような十分な設備や周辺環境を整えることが重要である。そして駅が電車の乗り降りだけをする場所という考えから脱し、住民を集め管理し、助け合えるような無人駅の環境づくりの見直しを進める必要がある。

01-3 周辺環境の衰退



駅の衰退は、周辺環境の衰退に繋がる。町の中心にあり周辺を商業施設などの環境がある有駅に比べ、無人駅周辺は比較的人気がない。この環境下では犯罪が多発しやすいホットスポットとなり、治安が悪化してしまう恐れがある。

↑無人駅の増加率

02 今回の対象無人駅 [東水巻駅]

02-1 東水巻駅



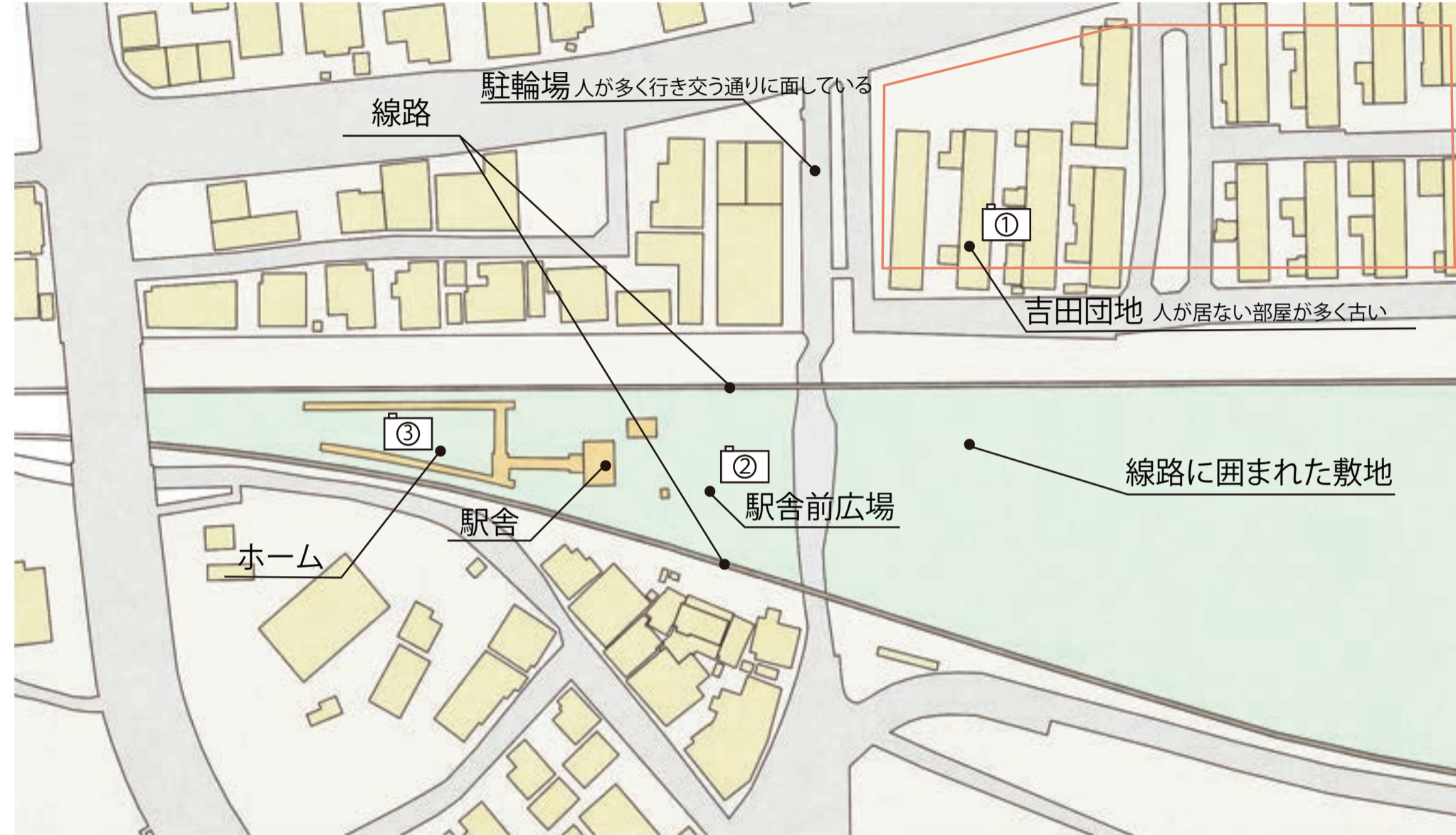
福北ゆたか線 線路図



駅正面

駅舎内の様子

02-2 周辺環境



駅周辺配置図

今回の対象敷地は駅ホームと線路に囲まれた駅前広場と、駅東側に位置する団地である。

作品名	Zero station	作品番号	2/4
校名	近畿大学		
氏名	林 成美		



①吉田団地

駅の北側に位置している。現在団地に住んでいる人は少なくあきが目立つ。夜は人気が無く薄暗い。



②駅前広場

線路で囲まれている。その為、車が入って来ることが無く比較的安全で落ち着いた雰囲気のある場所である。



③ ホームの状態

ホームは島式となっており、一つのホームの両側を線路が走っている形状。

02-3 周辺環境からみえる駅の問題点



本駅は線路で囲まれていて、さらに吉田団地などの住宅街の中に位置している。道路にも面していない利用する場合は駅内部まで入り込まなければいけない。その為周辺からの視認性にかける。



その為、夜間になるとさらにひと目に着きにくく犯罪が起こりやすい環境にある。また、普段使わない人は気づきにくい場所にある為、容易に見えぬ工夫が必要である。

03 目標

今回の目標は、①無人駅全体の問題点解決と②今回の対象駅に限った問題点に解決を図り新たな無人駅のあり方を模索するものである。一つ目の無人駅全体の問題点は人が集まらないことによる周辺環境を含めた過疎化である。二つ目の問題は、住宅などによる駅の視認性の悪さである。この両者を解決することで駅が町の玄関口としての役割を環境をつくる。新たな空間で、住民の主体となって維持管理し多くの人で賑わう駅になることを期待する。

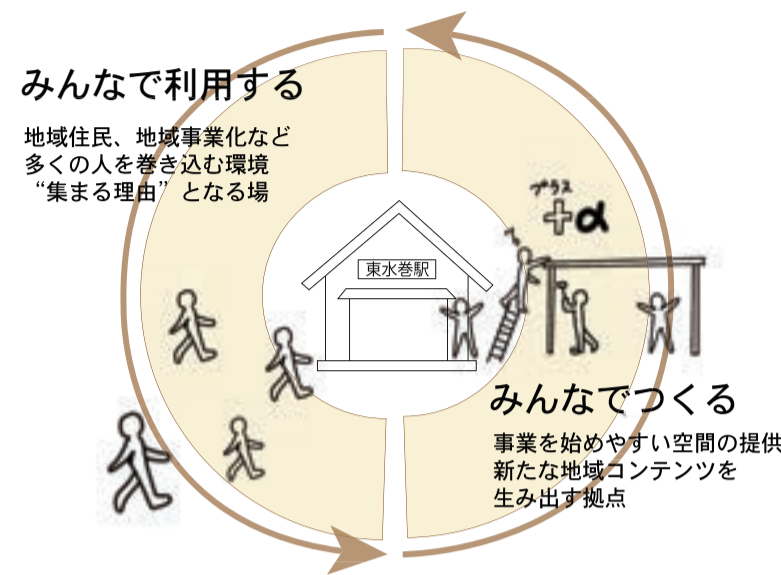


04 提案：人の声が溢れる地域の拠点

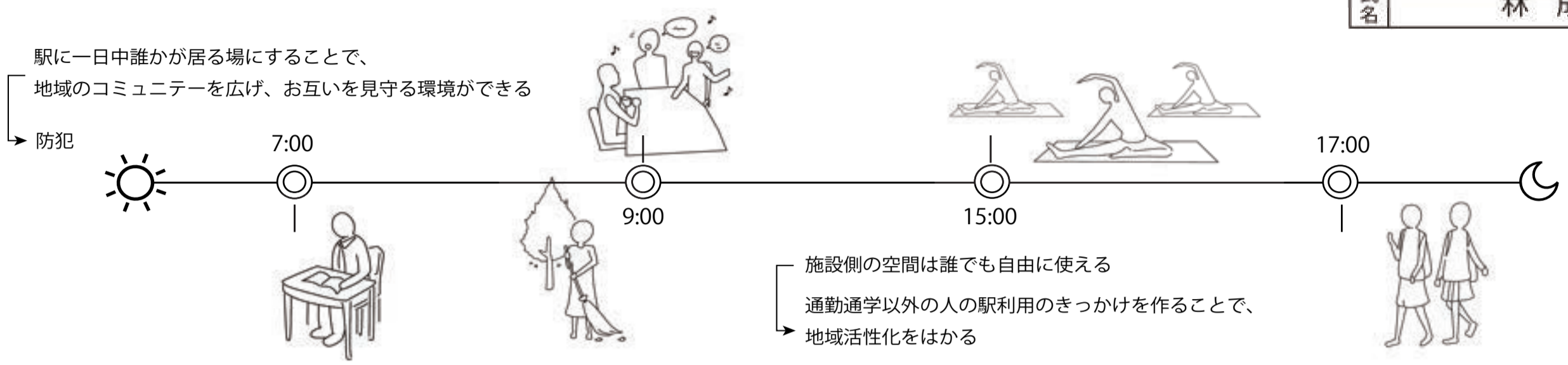
駅をただ電車を乗り降りするだけの為の場としてではなく、無人駅は新たなコミュニティの起点になる。地域の住民がそれぞれ要素を駅に持ち寄ることで、人が増える。互いに駅を自ら町の財産とし地域が主体となって管理することで、周辺環境の改善向上に繋がる。

作品名	Zero station	作品番号	3/4
校名	近畿大学		
氏名	林 成美		

04-1 持続的な駅利用



04-2 時間ごとで利用者の変化をつける



04-3 配置図兼平面図



04-4 構造

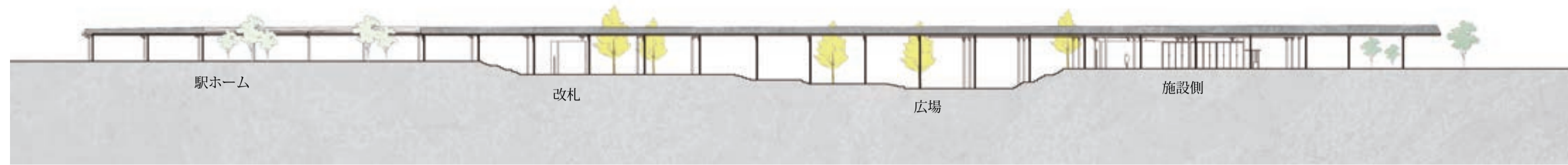


04-5 ホーム内の様子



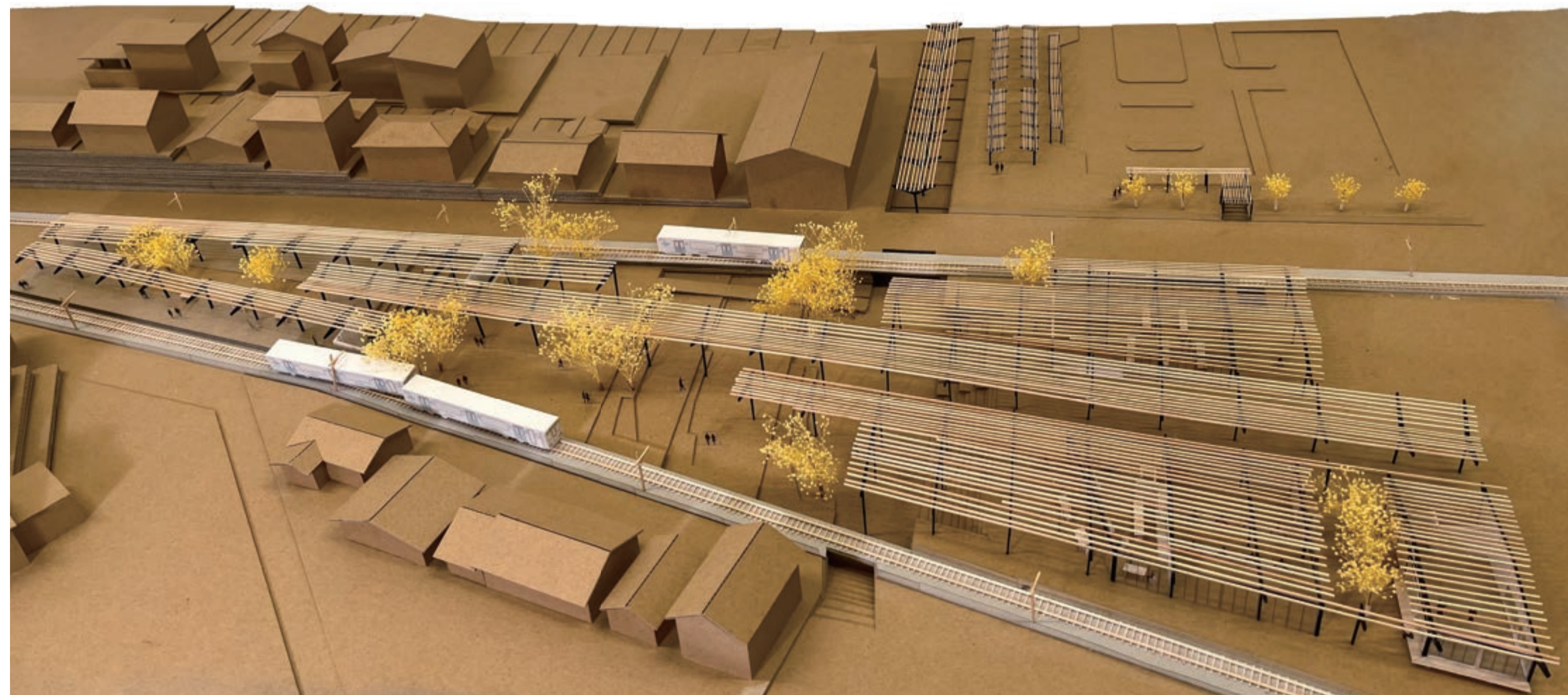
04-6 断面図

駅前広場は、駅ホームや施設側に比べて、2,000mm～2,500mm程度の高低差がある。その上に真っ直ぐの屋根がかかることでどこにいても同じ視線操作で、同じ空間を共有するような駅である。



05 模型写真

模型は1/150スケールで制作を行った。1mmの檜材を使い木梁を表現した。人の目線で覗くと、きれいに並んだ屋根裏の木梁がどこまでも続くのがわかる。新しくも、どこか馴染みを感じることができるような空間を目指した。



駅ホーム内の様子



駅前広場の様子



駅前広場から施設側を見たときの様子



施設側和室の建物の様子

作品名	Zero station	作品番号	4/4
校名	近畿大学		
氏名	林 成美		

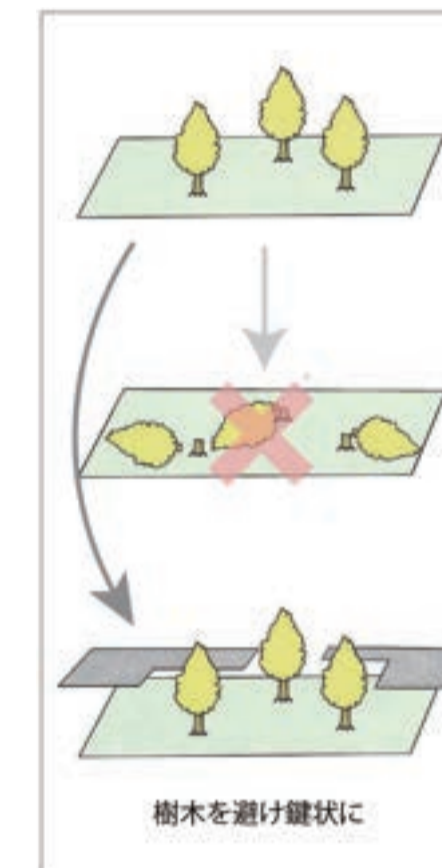
イチョウと屋根

対象全体に屋根をかけるにあたって、木と屋根の関係にルールを設けた。駅にもあるイチョウの木は、町のシンボルマークにも採用されており、神話の残る樹齢1900年を超える大イチョウの木があるなどとても馴染み深い木である。



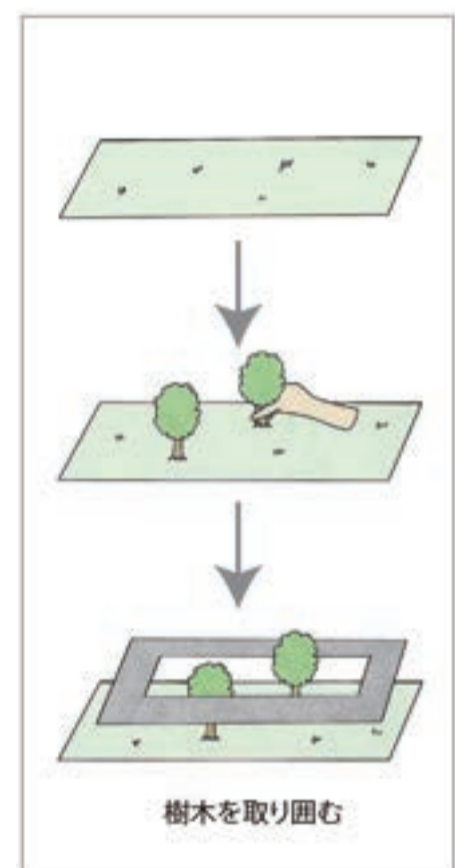
↑八剱神社大イチョウの木

①既存のイチョウの木



広場に植える既存の木は全て残し、屋根は避けるように配置した。樹木を避けるためにできた日当たりのコントラストは、人の広場での過ごし方に豊かさをもたらす。

②新たに植える木



何も無い場所にあらたに植える木は駅ホーム内、施設側の敷地にありその場合は、その周囲を囲う形で屋根を配置した。建物内の空間に抜け感と自然を取り込む。